

第57回アイカ現代建築セミナー

テーマ「New Organisation」

講師：伊東豊雄（建築家）

2008年7月2日（水）

於：NHK大阪ホール

はじめに

私はこれまでに5回ほどセシルさんと講演会や対談をご一緒しています。1990年代半ばにドイツのワイマールで開催された講演会が最初です。そのときに私の講演のなかで、あるひとつの映像を映しました。水中に1本の杭が立っており、片方からもう片方に水が流れて行くときに、杭の後ろに水の渦がどのようにできるかというのをコンピュータ・グラフィックスでビジュアルに表現したものです。水の流れの速さによって渦の形態がさまざまに違ってきます。それまでの建築というのは、まわりが変わっても変わらない、この杭のようなものであったのですが、しかし私は、水の流れのように変わる建築、渦のような建築をつくりたいと考えているという話をしました。渦はまわりの水と境界をもたず、水の変化とともに形も変化していきます。そういうやわらかい流動体としての建築ができないかと考えていたのです。

下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館 1993

イメージとしてあるものを実際の建築の構造に置き換えるにはどうしたらいいかという方法が私には見えていませんでした。諏訪湖畔に建つ博物館ですが、一見すると流動的な形をしています。しかし、この形態を成立させているのは非常に単純なジオメトリーなのです。背面に湾曲したコンクリートの壁が1枚立ち、それと直交するように1/4円のアーチがかかっている。つまり円弧の組み合わせでこの構造体を成立させています。この建築から10年以上が経っていますが、私の建築のイ

メージはそれほど大きくは変わっていません。ところが、こうした建築を成立させる方法が大きく変わりました。その方法を確立していく課程において、セシルさんとのコラボレーションが果たした役割は非常に大きなものでした。

サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン 2002

実質的にこれがセシルさんとはじめてコラボレートした作品です。プロジェクトの説明は省き、コラボレーションの内容を中心にお話します。2001年の年末にセシルさんから一緒にやろうという電話をもらいました。しかし、2002年7月には完成してはいくはない、つまり、わずか半年で設計から施工までをやらなくてはならないプロジェクトなわけです。1月にセシルさんにふたつのイメージを送りました。ひとつは17m四方の高さ4.5mで1枚の屋根スラブが柱状の支えがない状態の、なんらかの方法で宙に浮かんでいる案、もうひとつが同じボリュームですが、内部には1本の柱もない、表面のパッケージによって構造体が成立するイメージでした。表層だけでつくる案については、メッシュ状になんらかの補強を加える案と、セシルさんのワイマールでのレクチャーで紹介されていた、あるスタジアムのためのスケッチから、僕が勝手に発想した、ランダムに玉突きの軌跡のようにラインが交錯していくことによって屋根を支えることができないだろうかというファックスを流しました。その後、2週間後にロンドンではじめてセシルさんと打ち合わせたときにA4用紙にびっしりとスケッチが描かれたものが10数枚出てきました。他のエンジニアとセシルさんが大きく違うのは、セシルさんは無尽蔵にアイデアが出てくるところです。そのなかから私のイメージに合うものを選び、模型で確認したりしながら進めます。本当に一緒になって考えます。セシルさんはときに

数学者になり、エンジニアになり、思想家になります。私はランダムにラインが交錯するという事までしか思いつかなかったのですが、セシルさんは意外と人間はランダムといっても既視感のあるものしか出てこない、しかしアルゴリズムによって、あるルールを与えることによって、むしろ体験したことの無いラインが生じてくるはずだ、とっていました。サーペンタイン・ギャラリーは、実際に内部に入ると稜線が消えてしまい、四角い箱でなくドームのなかにいるように感じられました。また閉じ込められたという感覚がまるでなく、内外が反転したような、いままで体験したことの無い不思議な感覚にも襲われました。

台湾大学新社会科学部図書館棟 2006

台北に建つ大学施設で、社会科学部の校舎の手前に図書館棟があります。セシルさんと協働のプロジェクトで、目下、基本設計が終わったところです。まわりの環境に連続させて、大きな木々の樹陰の下で読書するようなイメージです。一見するとランダムに見えるような柱の配置が、実はあるアルゴリズムのルールにしたがってつくられています。従来の柱の立て方は、仮にランダムだとしてもユークリッド幾何学の座標軸のなかに立てていきます。しかし、この場合は中心があり、そこから放射状にひろがっていくスパイラルのライン上に柱がきます。いくつも中心があり、花びらがたくさんつながっていくように展開しますが、その展開したものの、3つの中心からなる一部を切り取って図書館の屋根ができています。つまり繰り返しもあり、いくつかの中心もあります。20世紀の建築を象徴していた均質とは異なる、自然に近い空間に少し近づいたものといえます。

レ・アール地区再開発コンペ案 2007

パリのレ・アール地区再開発のコンペ案で、や

はりセシルさんと一緒にやりましたが、入選しませんでした。レ・アール地区はパリの中心にあり、地下には地下鉄等が交差し、ショッピングセンターもあって1日100万人もの人々が行き交いますが、地上の公園が荒廃しているのを改良するための提案です。そこで地下にあふれるエネルギーをいかにして地上に引き上げてくるかをテーマにイメージしました。ここでもセシルさんは、打ち合わせの度に山のようなスケッチを出してくれました。その結果、逆三角形のヨットの帆のようなコンクリートの構造体のパーツで構成した抽象的な木々が並んだようなプロジェクトになりました。大小の三角形のなかに中心がいくつかあり、逆三角形の構造体はそれぞれねじれています。それぞれは相互に旋回、上昇しながら、各レベルで構造的に有効な相補ネットワークを形成していくというものです。

多摩美術大学附属図書館 2006

これは構造の佐々木睦朗さんとのコラボレーションです。1階床は周辺の敷地の傾斜に合わせて1/20のスロープになって、外部との連続性をつくりだしています。一見するとコンクリート打放しのアーチの連続する構造体ようですが、スチールプレートをなかに入れることで非常に薄くて軽い構造体になっています。ここではグリッドにねじったり、ひねったりという変形を加えていくことで非建築化を図っています。グリッドをたわめて90度を外して交錯させていくだけで、非常に変化に富んだ空間が生まれます。建物は2層ですが、スパンが1.8mぐらいから10数mまで変化します。足元が非常に細いアーチになっており、交錯する角度がそれぞれ異なるために、多様に違った形になります。上下はフラットスラブですが、アーチに囲まれることで、各ブロックがそれぞれに分節されたエリアを形成し、かつ家具によってそれをまた連続させています。

カリフォルニア大学バークレー校美術館・パシフィックフィルム・アーカイブ 2006～

やはり佐々木睦朗さんとコラボレーションしている作品で、基本設計が終わった段階の新しいプロジェクトです。敷地は大学の正門の前、周辺の街と接したところに位置します。そのため、街のグリッドをそのまま継承しつつ、キャンパスの流動的なネットワークも取り込んでいます。これもまた、グリッドを変形させていくという考え方です。通常の美術館はグリッドのホワイトキューブに穴をあけて連続させていきますが、ここではねじったり、ひねった壁のコーナー部分に三角や逆三角の隙間ができますが、そこを通じて空間が連続していきます。グリッドで一度切れた空間をもう一度リボン状に連続しています。3層で、総面積は仙台メディアテークと同じくらいの規模です。街のグリッドと大学キャンパスの流動性が、グリッドの変形に反映しています。多摩美術大学の図書館と同様、ここでも分節されながら連続しています。2枚の鉄板の間にコンクリートを打つことで、大体10cmの壁厚で済みます。リボン状の壁が表になったり裏返ったりして壁が連続しています。広場や外部に面しても、明確に内外を区別するのでなく、水が流れるような連続的な境界面で構成しています。またここを訪れた人々が、アーカイブスも調査・研究活動も含めたさまざまな活動が視覚的に把握できる、総合して一体となったものがミュージアムであるという概念をつくり出したいと考えています。

台中メトロポリタン・オペラハウス 2006

セシルさんと協働しているプロジェクトで、ようやく実施設計が終わりました。2000席、800席、200席の大中小3つの劇場と商業施設で構成されます。構造体は水平・垂直方向に連続するチューブの連続体で、壁を隔てて2組の連続体が隣り合っています。五角形や六

角形を連ねて、それをプログラムに合わせて4層分にして変形させていき、それらを結んでいくと立体的になったネットワーク状の空間が生まれる。それをなめらかにしていくと、まるで骨格のような構造体になっていきます。しかし、こういう形なので実際にスタディするのはたいへんでした。メッシュ状のスタディモデルを山のようにつくってやりました。床をどのレベルに設定するかで刻々と面積が変わります。またどこまでが床でどこから壁か、どこから天井かもはっきりしません。いままでの建築のさまざまな約束事がまったく意味をなしません。全体を58のブロックに分け、トラスウォール工法という、両側にメッシュを張って内部にトラスを入れてつくることに決定したところです。すでに日本でモックアップもつくりました。ここ数ヶ月のうちに入札、秋に着工の予定です。断面を10cmきざみに切ってつなげていった映像を見ていると、本当に流動体のような姿で現れてきます。以上です。どうもありがとうございました。

(拍手)